

放送大学の教育における文化人類学関係の映像が果たす役割

著者	祖父江 孝男
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	35
ページ	113-120
発行年	2003-02-10
URL	http://doi.org/10.15021/00001979

放送大学の教育における文化人類学関係の 映像が果たす役割

祖父江 孝男

放送大学 客員教授

国立民族学博物館 名誉教授

- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 1 はじめに | 3 放送大学のテレビ番組に対する評価 |
| 2 文化人類学の領域における放送大学の
テレビ番組 | 4 映像表現の諸様式と伝達機能の比較考察 |

1 はじめに

1985年に発足した放送大学は1997年秋に、いよいよ全国化の段階に入った。上にも触れた様に、放送大学自体は既に教養学部として1985年4月に発足し、この時に第1回入学生を募集した(放送大学には入学試験はなく、18歳以上であれば、誰でも入学できる)。専攻は6つに分れ、「生活科学コース」のなかに、〈生活と福祉〉〈発達と教育〉の2専攻が、「産業・社会コース」のなかに〈社会と経済〉〈産業と技術〉の2専攻が、「人文・自然コース」のなかに〈人間の探求〉〈自然の理解〉の2専攻に分れている。これらに含まれる科目は共通科目と専門科目の2つに分れているが、共通科目36単位以上、専門科目64単位以上修得することになっている。

なお学生の種類は全科履修生、選科履修生、科目履修生の3種類に分れているが、全科履修生は4年以上在学して所定の124単位をとれば学士号が取得できるようになっている。但し1997年9月迄は放送大学からのラジオ、テレビの電波は関東地方にしか直接に届いていなかったため、学生が自宅において直接に各科目を視聴できるのは関東地方に限られていた。関東以外の地域においては、現在までの時点で全国の各県にひとつずつ作られている「地域学習センター」においてラジオのテープ、テレビのビデオテープを視聴し、試験もそこで受けるようになっていた。こうした制約があるため、学士号のとれる全科履修生は関東地方に限られていたのである。

なおこうした放送大学の学生数は1997(平成9)年2学期において合計66,730名(男26,919名、女39,811名)。うち全科履修生は25,826名。選科履修生26,442名。科目履修生10,105名。研究生37名。特別聴講学生4,320名。次に学生全数のうち60歳以上7,610名、50歳台8,028名、40歳台13,611名、30歳台15,504名、20歳台18,072

名, 19歳以下 3,905名。職業をみると会社員 18,523名, 公務員 9,516名, 個人・自由業 3,097名, 教員 2,083名, 農業 263名, その他 18,086名, 無職 15,162名(主婦を含む)である。最後に学歴は高等学校等卒が 27,610人, 短大高専卒が 19,580名, 大学・大学院卒が 18,442名となっている。因みに卒業生の数は 1979(平成元)年の第1回の卒業式から現在迄合計 10,495名に達している。そのうち既に約 150名の者が各地の大学院へ進学しており, そのうち女子 1名は 98年 3月に博士号をとっている。

さて放送大学のラジオ, テレビの電波は, 1997年 10月, 当初に予定していたよりも早く通信衛星によって全国へ行き渡ることになり, こうして文字通り日本全国いたるところの住民が自宅でラジオ, テレビの視聴をすることが可能になったのであり, 全国どこでも学生の全員が全科履修生として卒業をめざすことが出来るようになった。なお卒業資格を得るためには, 放送授業の試験を受けてそれぞれの単位をとる他に, 学生センターにおける面接授業と, これは今では必須ではなくなっているが, 卒業研究(卒業論文)もとらなければならないが, これが最も多くの時間と労力をさかねばならないものとなっている。

2 文化人類学の領域における放送大学のテレビ番組

テレビ, ラジオによって放送大学で放送されている番組の科目数は現在のところテレビ 142, ラジオ 153(年々少しづつの増減はある。なおひとつの科目は 50分づつの講義 15本からなる)であるが, この稿ではこうしたテレビ番組のなかで, 特に文化人類学関係のものについてとりあげて考察を進めていくことにしたい。文化人類学(民族学, 民俗学, 言語学そしてまたその他関連科目等も含む)関係の分野におけるテレビ番組は次の通りである。なおテレビ, ラジオの両方とも, 4年毎に改訂されている。但し事情によっては更に 4年同じものが継続放送されるが, 原則として 8年続けて放送されたあとは, 講師を変更し, 新しい講師によって 4年ないし 8年間の放送がなされることになる。このように定期的に変更がなされるのであるが, ここにあげたのは 1998年度 1学期に放送されているものである。

文化人類学
世界の民族
世界の宗教
言語学
生活学入門
生活文化史
都市と農村

比較文明の社会学
 コミュニティ論
 動物の行動と社会
 ジェンダーの社会学
 博物館学Ⅰ
 博物館学Ⅱ
 歴史考古学
 日本の古代
 日本の近代
 朝鮮の歴史と文化
 南アジアの歴史と文化
 イスラーム世界史
 ヨーロッパの歴史
 ヨーロッパと近代世界
 アメリカの歴史
 民族音楽学理論

なお上記のテレビ番組の他に面接授業（集中面接授業を含む）において、次のような講義がなされているが、これらは時期によって、多少の変更がある。

文化人類学入門
 医療人類学
 映像人類学
 開発と文化変化の問題
 韓国社会の文化人類学
 日本仏教の人類学
 ビルマの社会と人々
 他

3 放送大学のテレビ番組に対する評価

それでは放送大学における、こうしたテレビ番組に対してはどのような評価が学生の側からなされているのであろうか。この点については開講から10周年にあたる1995度にあたり、学生からの情報を総体的に把握する目的で、嘉治元郎副学長を責任者とする「放送大学学生動態調査'95」が企画され、同年から翌年にかけて3回の

調査が行われた。その結果が『放送大学学生動態調査報告書：大学は開かれているか』として98年3月に大学から刊行されているので、このなかから引用させて頂くことにしたい。(放送大学1998:140)

テレビ放送教材による学習それ自体に対してはそれなりの評価がある。「テレビで実験などをみると、とてもよく講義内容が浸透する。」「テレビ放送で講師の必死の努力に応えたい。」「工夫されて学習効果の上がる授業と講師に出会った時はとてもやる気を起こさせてくれる。」というように、テレビ放送教材による学習効果は大きい。しかし先にみたように、テレビ放送教材に対しては期待が大きいだけに、厳しい指摘も多くなっている。その内容を講師の技能に関するものと制作技術に関するものに分けてまとめておこう。

テレビ放送教材は、メディアそれ自体の特性から、演出効果、技量と演技効果、技量をはっきりさらすことになる。とりわけ演技効果・技術においては放送大学の講師陣は特別の訓練を受けてはいない。それゆえの技能に関する指摘には厳しい内容のものが目立つ。具体的には以下のような指摘があるが、もちろんこうした指摘がすべての講師にあてはまるわけではない。科目間の質のばらつきが大きいのである。なお、こうした指摘は、概して複数の担当講師からなる科目についてあてはまる傾向がある。講師の技能に関しては具体的に次のような指摘がある。

「棒読みである。」「めりはりがない。」

「放送のテンポが一般に悠長である。繰り返しは不要。」

「つかえる」

「目線がきよときよとしていて落ち着かない」

「てにをはをいい間違える」

また、制作技術に関して具体的な改善を求める要望もある。

「せっかくのテレビであるから、話ばかりでなく画像を豊富に利用してほしい。」

「カメラワークに工夫を。図表が切れてしまうことがある。」

「説明図表は大きなものにしてほしい。」

「語学のTV画面に色彩文字が入るようになってからみづらい」

「テレビ画面として絵柄が平面的、短調なものが多い」

「文字の判別が難しい(特に化学式など)。」

「座談形式はなくてもよい。」

「講義のタイトルを画面隅に表示してほしい。」

さまざまに素直な意見が多く寄せられているが、講師の技能の方はいわば「慣れ」

によって大幅に異なってくるものであり、はじめての出演の場合と2回目以降の出演の場合とでは相当に異なってくる事が多く、放送大学の専任の教員の場合は出演の経験が次第に豊富となるにつれて「演技」の方も上達するのに対して、外部の講師が1回だけ出演した場合は初めてなので、欠陥だけが目立ってしまうのである。

4 映像表現の諸様式と伝達機能の比較考察

では次に大きく角度を変えて、放送大学のテレビにおける映像表現の方式を基本的な点で分類してみるとどのように分れるだろうか。またそれらの各々を伝達機能という点から比較してみるとどの様になるか、従って文化人類学などを含む諸分野においてテレビによる授業を行う場合は、どのようにするのが最も効果的であるかという問題についてとりあげることにしたい。千葉県千葉市美浜区若葉の放送大学本部に隣接して設置されている文部科学省大学共同利用機関である放送教育開発センター（現在はメディア教育開発センター）では、1983年11月にシンポジウムを開いてこの問題を論じたのであり、その報告が同センターの研究報告に発表されている（中原1984；内田1985）ので、それに基づいて次に報告することにしたい（なお国立民族学博物館において1987年7月に行われた国際シンポジウムにおいて祖父江は上の資料について報告している）。

このシンポジウムのための試作番組としてモデルにとりあげたのは、「宗教理論と宗教史」という番組であり、柳川啓一氏が主任講師であった。この番組は1982（昭和57）年に放送大学のための実験番組としてテレビ朝日で制作されたが、1984（昭和59）年度に開発センターで研究開発番組として再制作され、後者がそのまま1984（昭和59）年4月開校の放送大学で放送講義として使用された。この比較研究において、内田氏は「宗教理論と宗教史」の15本の講義（各50分）のなかから第12回「天国と地獄」を選んだが、これは実験番組のなかで最も一般的、平均的なスタジオ形式であることと、内容が比較的バラエティに富んでいて、多種類の構成・演出形式が可能に思われたこと、そして出演講師の理解と協力が得られそうだったからである。そしてここに選定された6タイプとは次の通りである。

(1) 第1タイプは教室の講義そのままを1台の固定カメラで録画したもので、カメラは学生の目の位置におく。従って画面はいわば学生のみた目で、講師のバストショットと背後の黒板だけが、ずっと写っていることになる。

この形式は学生にとっては最も退屈なものではないかと思われる。しかし現実の大学生たちは毎日こういう授業体験をしているのであるから、学生にとっては最もリアルなものなのであり、放送大学の学生にも、ある意味では一番ふさわしい形式なのか

もしれない。またカメラや照明機材などが極く小規模ですむため、講師もあまり撮影だということを意識せずに、平常通りの授業が出来やすいというメリットもある。なお費用はスタジオ形式と並んで最も安価である。

(2) 第2タイプは教室の講義を3台のカメラで撮る形式であり、第1タイプとシチュエーションは同じだが、テレビ的モンタージュ手法で、講師の表情のクローズアップ、黒板の文字、学生のリアクション、質問や討議のやりとりなどを、必要なら編集も加えて番組化するので、実際の教室で講義を受けるよりも、ずっと魅力が出る。この録画のためには、照明やマイクロフォンの量も増え、カメラの動くスペースも要るし、調整卓の場所も必要なので、講師はケーブルや機材に取り囲まれて授業をすることになってしまい、なかなか平常通りの授業が出来にくい。

(3) 第3タイプはスタジオ形式である。実は実験番組の99%以上がこの形式である。講師がスタジオでカメラに向かって直接に講義をする。講義内容に必要なものは文字、図表、絵などはパターンにして出し、スライド、スチール、フィルムなど入手できたものもインサートする形である。

(4) 第4タイプは現場での中継録画形式である。講師は実際の現場に身を置き、周囲の環境を背景に、現物あるいは進行中の行事等を解説しながら講義を進める。この方式は臨場感の出るのが極めて大きな特色だと言える。但しロケをやめるためには、適当な場所を探すためのロケーション・ハンティング（ロケハン）、現場との交渉、機材の運搬と設営、現場における通行人等への対処等々をしなければならず、それには多くの人手と多くの経費を必要とする。

(5) (6) 第5と第6タイプはVTRロケーションを主とした、ドキュメンタリー形式である。但し第5タイプの方はドキュメンタリーといっても、解説は講師自身が行う。従ってロケに同行して現地で語ったり、編集済みのビデオに解説をつけたりするのは、講師自身が自分の言葉・口調で行い、アナウンサーやナレーターは使わない。音楽や効果音も最小限にとどめて、いわばVTR構成の講師講義という形である。スタジオは使わないが、講師の顔出しは時々ある。

これに対して第6タイプはいわゆるドキュメンタリーそのもので、専門のナレーターの語りで、音楽や効果音もふんだんに使い、時にはドラマティックでさえある。講師は顔も声も一切出さない。解説（講義）原稿は講師が書くが、ナレーション用台本はディレクターが書く。講師は監修の立場だからロケーションに同行する必要もない。

第5と第6は同じドキュメンタリーということで、映像的には似た部分が多いが、

講師の立場から考えると、大きな違いがある。

それではこのように6つの異なった形式の伝達機能を比較してみるとどうなるであろうか。どの形式が講義の内容を伝えるのに最も効果的で、どの形式がこれを見るひとに最もアピールしているのであろうか。この点について、この実験の講義の6形式のそれぞれを受けた日本女子大の学生に、それぞれの形式のよさ、わかりやすさ、おもしろさ、学習意欲、迫力の各々について評価・採点をさせた結果が第1表であるが、上の各項目の全てにおいて、第6タイプのドキュメント（ナレーション）が第1位で第1タイプ（ひとつのカメラによる教室での講義）が最低であった。全平均点で順位をつけると<1>ドキュメント（ナレーション）、<2>ドキュメント（講師解説）、<3>現場中継、<4>スタジオ、<5>教室（3カメ）、<6>教室（1カメ）という結果であった。

以上の様な諸研究の結果をかえりみながら、今後の放送大学の教育における効果的なテレビの活用についていろいろ考えていくことが出来ると思う。

表1 内田論文 49 ページ

受講生による項目別採点表（日本女子大）

(10点満点)

タイプ \ 項目	よさ	わかり易さ	おもしろさ	学習意欲	迫力	全平均
スタジオ (79人)	5.44	5.88	4.27	4.39	3.78	23.77
教室 (1カメ) (80人)	3.84	4.39	3.78	3.83	3.17	18.98
教室 (3カメ) (79人)	4.95	5.06	4.77	4.61	4.27	23.65
中継 (82人)	5.98	5.61	5.95	5.04	5.52	28.09
ドキュメント (講師) (83人)	6.92	6.71	6.73	6.13	6.47	32.96
ドキュメント (ナレーター) (83人)	7.98	7.69	7.87	7.01	7.95	38.49

文 献

放送大学

1998 『放送大学学生動態調査報告書—大学は開かれているか』。

中原健二郎

1984 「映像表現の6形式」『NME 研究ノート6』 pp. 37-40。

Sofue, T.

1988 Use of Anthropological Films for College Education through Television. In P. Hockings and Y. Omori (eds.) *Cinematographic Theory and New Dimensions in Ethnographic Film* (Senri Ethnological Studies 24), pp. 151-164. Osaka: National Museum of Ethnology.

内田安昭

1985 「6タイプの試作番組による研究——制作システムのテストを兼ねたコースチーム」『NME 研究ノート21』 pp. 31-49。